

Prajñāpradīpa-ṭīkā 第一章和訳 (3)

西山 亮

はじめに

本稿は、Avalokitavrata (700 年代前半) の *Prajñāpradīpa-ṭīkā*¹ (以下 PPT) 第一章の和訳とシノプシスであり、拙稿・西山 [2010, 2012] に続くものである。訳出に当たっては *sDe dge* 版と *Peking* 版を校合し、注釈対象である Bhāviveka (ca. 500-570) の *Prajñāpradīpa* (以下 PP) についても同じ二版の異読を採取した。このたび訳出した PPT のロケーションは以下の通りである。

- ・ *sDe dge* : Tohoku no. 3859, Wa 8b3 - 13b3.
- ・ *Peking* : Otani no. 5259, Wa 10a4 - 16a5.

また、本稿で訳出した PPT において引用され、注釈が施される PP のロケーションは以下の通りである。

- ・ *sDe dge* : Tohoku no. 3853, Tsha 46a1 - 3.
- ・ *Peking* : Otani no. 5253, Tsha 54a1 - 5.

本稿において訳出した範囲は「論典のつながり」の前半の一部である。「つながり」と訳したのは「*brel pa*」というチベット語原文であり、サンスクリット語としては「**saṃbandha*」が想定される。「つながり」は、論典においてしばしば冒頭に述べられる緒言 (*ādivākya*) に含まれるものであり、他にも「主題 (*abhidheya*)」や「目的 (*prayojana*)」が言及されることが多い²が、PP および PPT においては、「主題」と「目的」という語は見出されない。Bhāviveka にとって「つながり」とは「法脈、血脈」であり、実際に、釈尊と龍樹の出自を物語ることによって両

¹ PPT の撰述問題や、その著者 Avalokitavrata の活躍年代については赤羽・早島・西山 [2011, 167-168] の「補足」を参照されたい。

² e.g. *Hetubindu-ṭīkā* of Arcaṭa, two *Nyāyabindu-ṭīkā* of Dharmottara and Vinītadeva, *Pramāṇasamuccaya-ṭīkā* of Jinendrabuddhi, *Prasannapadā* of Candrakīrti, *Tattvasaṃgraha-pañjikā* of Kamalaśīla, etc. see 天野1969, 一郷1985, and Funayama1995.

者の「つながり」が確認されている。あるいは「論典のつながり」と言っている
ので、正確には釈尊の教説 (āgama) と龍樹の『中論頌』との「つながり」という
ことになる。Avalokitavrata はこれを「系譜 (rigs pa) のつながり」と呼び、また
それと不可離なものとして「意味 (don) のつながり」を置いている。「意味のつ
ながり」において、釈尊と龍樹に関する物語が、出現の因と、自利の果と利他の
果という三つの要素に分析されており、その「意味のつながり」を結びつけるこ
とによって、全体としての「系譜のつながり」が理解されると説明されている。
本稿はそのうちの、釈尊の出現の因が説かれる箇所を範囲としている。

Prajñāpradīpa-ṭīkā 第一章和訳

4 論典のつながり

4.1 総論

「そこで、論典のつながり ('brel pa: *saṃbandha) を述べる」³について言えば、
「論典のつながり」という語を説き起こ (nye bar dgod pa: *upanyāsa) そうとして、「そ
こで」ということばが最初に用いられたのである。「論典」という語は直前で⁴す
でに説明している。「つながり」は二種類ある。「系譜 (rigs pa) のつながり」と
「意味 (don) のつながり」とである。

そのうち「系譜のつながり」とは師資相承 (bla ma brgyud pa) のことであり、仏・
世尊と造論者 (= Nāgārjuna)⁵がなぜ出現したのかという因を説いたものである。「意
味のつながり」とは〔論典を構成する〕部分の意味を説いたものであり、つまり
「系譜のつながり」を説くことそれ自体が諸著作 (gzhung: *grantha) の部分の意味
を説いたもの (= 意味のつながり) なのである。

³ 先行訳は次の通り (いずれの括弧もすべて原著のまま) :

・Kajiyama[1963, 40.11 - 12]: Dabei spreche ich zunächst von der Beziehung (saṃbandha) des Werkes.
・能仁[1992, 47.13]: そこで論書の関係 (saṃbandha) を述べる。

・Ames[1993, 213.9b - 8b]: As to that, the connection of [this] treatise (śāstra) is stated [as follows:]

⁴ PPT D Wa D8a7 - b3, P Wa 9b8 - 10a3, 西山[2012, 38.9 - 13].

⁵ 直後に引用される PP に後続する箇所において、「造論者 (bstan bcos mdzad pa)」が『中論』
の帰敬偈を述べたことになっているので、「造論者」は Nāgārjuna である。

4.2 釈尊の出現の因と果

4.2.1 pratika の導入

まずその〔仏・世尊と造論者の〕うちの最上の師である仏・世尊出現の因を示し、その後で造論者出現の因を示すことにしよう。その〔順序〕にしたがって、〔まず〕その〔仏・世尊出現の因〕だけを示すために、

この〔世〕で世尊は偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知をお持ちになり、幾百千コーティ・ナユタという量り知れない劫の中で、福德と知の数えきれないほどの資糧の荷をお積みになった。そのとき、他者に利益が生じることと結びつき、自身の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことのない御心をもって、世間の人々が、生・滅、断・常、来・去、異・一などという戲論の密な網のなかでさまよい、光に照らされていないさまをご覧になって、智慧によって所知の海を攪拌し、すべての戲論の網をよく離れ、他に依存せず、無分別である、一切法の真実というアムリタを得て、最勝の乗りものをもって、人々に対して、生まれ、年齢、〔四〕姓、場所、時を逸脱せず、異教の創始者、声聞、独覚のすべてと共有しえない縁起という最高の宝石を、世俗と勝義の諦に依って、生・不生などの表現をもってお説きになられたのである⁶

⁶ 漢訳 (T30, 51c2 - 11.) : 「婆伽婆見彼無明衆生。世間起滅断常一異来去等諸戲論網稠林所壞。起第一悲。發勇猛慧。於無量億百千俱胝那由他劫。為利益他。捐捨身命。無厭倦心。能担無量福慧聚担。鑽般若境界海。断一切戲論網。非他縁無分別。得一切法真実甘露。於彼趣壽分齊。性処時等。摂受利益。不共一切声聞縁覺。及諸外道唯為進趣第一乘者。依彼世諦。第一義諦。施設不起等諸名字句。此縁起実説中最勝」。

この PP の文言に対してなされた諸研究者の翻訳は以下の通りである (いずれの括弧もすべて原著のまま)。

・ Kajiya[1963, 40.13 - 41.3] : Der Erhabene (*bhagavān*), der wegen seines großen Mitleids von der Weisheit, welche die Verkündigung (seiner Lehre) bewirkt, erfüllt ist, hat während unzähliger Millionen von Weltaltern die unermessliche Last genannte Ausrüstung an Tugenden und Wissen (*punyañānasambhārah*) erworben. Er hat dann kraft seines mit dem Bewirken fremden Heiles verbundenen Mitleids, das selbst nicht durch Leiden erschöpft wurde, die mit der Preisgabe des eigenen Lebens verbunden waren, gesehen, daß sich die Welt im Dunkel befindet, weil sie im dichten Netz der Vielfalt von Entstehen und Vergehen, Vernichtung und Ewigkeit, Kommen und Gehen, Mannigfaltigkeit und Einheit usw. umherirrt. Er hat daraufhin mit (dem Quirl) der Einsicht das (Milch-) Meer des zu Wissenden gequirlt und den Nektar der Wahrheit über alle Gegebenheiten gewonnen, der vom Netz der Vielfalt vollkommen frei, durch fremde Hilfe nicht zu erkennen und dem begrifflichen Denken nicht zugänglich ist, und hat auf die beschränkte und höchste Wahrheit (*saṃvṛti*-, *paramārtha-satyam*) gestützt mit Worten wie Entstehen und Nichtentstehen denen, welche im vorzüglichsten Fahrzeug (des Mahāyāna) fahren, den herrlichen Edelstein des abhängigen Entstehens (*pratītyasamutpādaḥ*) mitgeteilt, welcher (des Hörers) Geburt, Alter, Geschlecht, Ort und Zeit nicht unberücksichtigt läßt, und den alle fremden Lehrer (*tīrthikāḥ*), Jünger (*śrāvakāḥ*) und Einzelbuddhas (*pratyekabuddhāḥ*) nicht besitzen.

・ 一郷[1977, 4.6 - 17] : 世尊は、偉大な慈悲によって〔縁起の教説を説かねばならぬという〕意欲をおこす智慧をおもちになり、百千コーティ・ナユタの数え切れぬカルパにわたって多量

'di la bcom ldan 'das thugs rje dam pas spro ba rab tu bskyed pa'i blo gros mnga' ba / bskal
 pa bye ba khrag khrig 'bum phrag dpag tu med par bsod nams dang ye shes kyi tshogs
 gzhal du med pa'i khur bzhes par mdzad pa na / gzhan la phan pa skye ba dang rjes su 'brel
 ba'i thugs rang gi srog dang 'bral ba'i sdug bsngal gyis kyang yongs su mi skyo ba mnga'
 bas 'jig rten skye ba dang / 'gag pa dang / chad pa dang / rtag pa dang / 'ong ba dang / 'gro
 ba dang / tha dad pa dang / gcig pa la sogs pa spros pa'i dra ba thibs por 'khyams shing
 snang ba med pa la gzigs nas / shes rab kyis shes bya'i rgya mtsho mngon par bsrubs te chos
 thams cad kyi de kho na'i bdud rtsi spros pa'i dra ba mtha' dag dang legs par bral ba /
 gzhan gyi dring mi 'jog pa / rnam par mi rtog pa (PPT-P rtogs pa) brnyes nas / theg pa
 mchog gis (PPT-P gi) 'gro ba rnam la / rten cing 'brel bar 'byung ba'i rin po che dam pa /

の福智の集積の荷を獲得なさるとき、自分の死の苦しみによっても倦むことのない - 他人に利益が生ずることにも合致する - 心をおもちになって、生・滅、断・常、去・来、多・一、等の戲論の厚い網の中を彷徨し、[出世間の智慧の] 光がさしていない世間を見そなわし、智慧によって、所知の大海を攪拌し[理解して]、すべての戲論の網をまさしく離れ、他人に依拠[して理解]されるものでなく、無分別のものである、一切法の真実の甘露を獲得し、最上[大乘]の乗物でゆく人々に対し、生れ、年令、家柄、場所、時を考慮した、外学派・声聞、独覚のすべてに共通でない、縁起というすぐれた宝石を、世俗および勝義諦に依って生・不生等の説明をもってお説きになった。

- ・能仁[1992, 47.14 - 48.8]: まず世尊は、[世間の人々を] この上なく同情する (paramakārunika 大悲) が故に、[縁起というすばらしい宝物を説かなければならないという] 熱烈な意欲 (autsukya) をおこす智慧をおもちになり、幾百千コーティ・ニユタという無数劫の間、福德と智の資材 (punyajiñānasambhāra) の計り知れないほどの荷を積み重ねられたが、そのとき、他者に利益が生ずることとむすびついた心は、もはや自己の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことはなかった。それ故、かの[世尊]は、世間の人々が生滅、断常、来去、異一等の概念的な虚構の稠密な網の中でさすらい、[智慧の] 光明に照らされないさまを観察なされ、智慧をもって所知の海をかき回し[すなわち理解して]、あらゆる概念的な虚構の網をよく離れ、[自己の直観によってのみ知られ] 他のものによって知られず (aparapratyaya)、無分別なるものである、あらゆる存在するもの (sarvadharmā 一切法) の真実たる甘露 (amṛta) を獲得なされた。そして最高の乗り物 (agrayāna 大乘) によって行こうとする人々に対して、生まれ、年齢、家系、場所、時節を逸脱せず、そして決して外教徒・声聞・独覚に共通しない、「縁起」というすばらしい宝物を、世俗諦 (saṃvṛti-satya) と勝義諦 (paramārtha-^o) にもとづいて、生や不生等の言葉によってお説きになられたのである。

- ・Ames[1993, 213.8b - 214.14]: Here the Blessed One, having intellect [as well as] zeal produced by excellent compassion, bore the burden of the measureless accumulations of merit (*punya*) and wisdom (*jñāna*) for immeasurable hundreds of thousands of *niyutas* of *koṭis* of aeons (*kalpa*). His mind was not depressed even by the suffering of losing his own life, [since he] was intent on the arising of benefit for others. He saw that the world was thrashing about in the dense net of conceptual proliferations, such as origination, cessation, annihilation, permanence, coming, going, multiplicity, oneness, and so on; and [he saw that the world] was without light. [Then] he churned the ocean of objects of knowledge (*jñeya*) by means of discernment and obtained the nectar (*amṛta*) of the reality of all dharmas, which is quite free from the entire net of conceptual proliferations, without dependence on others, [and] without conceptual construction. [Having done so,] he taught to those travelling on the Best Vehicle the excellent jewel of dependent origination (*pratītya-samutpāda*), which does not disregard birth, age, caste, place of residence, and time of day, and which is not shared by all the founders of non-Buddhist sects (*īrthakara*), the *śrāvakas*, and the *pratyekabuddhas*. [He taught dependent origination] by means of expressions such as “origination” and “nonorigination,” etc., depending on the superficial and ultimate truths (*saṃvṛti- and paramārtha-satya*).

skye ba dang / na tshod dang / rigs dang / yul dang / dus las (PP-P la) 'da' ba med pa / mu
 stegs byed dang / nyan thos dang / rang sangs rgyas thams cad dang thun mong ma yin pa
 kun rdzob dang / don dam pa'i bden pa la brten nas skye ba dang / skye ba med pa la sogs
 pa'i brjod pa dag gis bka' stsal to⁷

と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

4.2.2 意味のつながり

以上のことばを要約した内容は「仏・世尊〔出現〕の因を示し、そして自身と他者の利益という二つの特徴をもつ果報を説く」ということである。部分的な内容としては〔次の通りである〕。かつてこの〔世〕で世尊が菩薩行を行っていた際に、仏・世尊〔となる〕どのような因を成就して、自利を特徴とする果報である無上正等覚を現等覚し、利他を特徴とする果報である最勝の乗りものをもって、人々に対して、縁起という最高の宝石をお説きになったのか、である。

仏・世尊〔出現〕の因は「偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知をお持ちになり、幾百千コーティ・ナユタという量り知れない劫の中で、福德と知の数えきれないほどの資糧の荷をお積みになった。そのとき、他者に利益が生じることと結びつき、自身の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことのない御心をもって、世間の人々が、生・滅、断・常、来・去、異・一などという戲論の密な網のなかでさまよい、光に照らされていないさまをご覧になって、智慧によって所知の海を攪拌し」という〔文言〕によって述べられている。 P11a D9b

自利を特徴とする果報は「すべての戲論の網をよく離れ、他に依存せず、無分別である、一切法の真実というアムリタを得て」という〔文言〕によって述べられている。

利他を特徴とする果報は「最勝の乗りものをもって、人々に対して、生まれ、年齢、〔四〕姓、場所、時を逸脱せず、異教の創始者、声聞、独覚のすべてと共有しえない縁起という最高の宝石を、世俗と勝義の諦に依って、生・不生などの表現をもってお説きになられたのである」という〔文言〕によって述べられている。以上が意味のつながりである。

⁷ PP, D Tsha 46a1 - 5, P Tsha 54a1 - 8.

4.2.3 意味のつながりの結びつき

そこで、意味のつながりの結びつきは次の通りである。かつて世尊は、菩薩行を行っていた際に偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知をお持ちになり、世間の人々を哀れんで、最勝の乗りものをもって、人々に対して、縁起という最高の宝石を示すことを目的となされた。〔しかし、〕自らが解脱せずに他者を解脱させようという動機付けは正しくないと考えて、幾百千コーティ・ナユタという量り知れない劫の中で、福德と知の数えきれないほどの資糧の荷をお積みになった。そのとき他者に利益が生じることと結びついた御心は、難行によって、〔つまり〕自身の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことはなかった。他者に利益が生じることと結びつき、難行による自身の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことのなかった御心をもって、世間の人々が、生・滅などという戲論の暗く密な網のなかでさまよい、世間を超えた智慧の日輪のような光に照らされないさまをご覧になって、スメールという攪拌棒のような智慧によって、乳海のような所知を攪拌した。

この因により、自利を特徴とする果報である一切法の真実⁸というアムリタを得て無上正等覺を現等覺した後に、利他を特徴とする果報〔として〕、最勝の乗りものをもって、人々に対して、縁起という最高の宝石を、世俗と勝義の諦に依って、生・不生などの表現をもってお説きになられたのである。最上の師である仏・世尊出現の因は以上のようなものである。〔この〕ような意味のつながりの結びつきによって、系譜のつながりの結びつきが見られよう。

4.2.4 字句の意味

4.2.4.1 「世尊」について

では、字句の意味を解説しよう。「この〔世〕で」とは近くを指している。「この〔世〕で世尊は」について言えば、この出世間道にまします世尊と交わるべきであり⁹、世間道に位置するナーラーヤナ (=ヴィシュヌ) などの尊者とは交わるべきではない。〔というのも、〕この〔出世間道にまします世尊〕こそが、真の世尊 (bcom ldan 'das dngos po) だからである¹⁰。

⁸ Dは「法 (chos)」という語を欠くが、PPTの別の箇所において「chos thams cad kyi de kho na」という表現が用いられているので、「法」の語が見られるPを採った。see 西山[2010, 58.11-12].

⁹ D sbyar gyi: P sbyar gyis.

¹⁰ チベット語としては、仏陀とヴィシュヌの称号をそれぞれ「bcom ldan 'das」と「legs ldan」

「世尊」について言えば¹¹，【解釈 1】出世間道に対する世間的な恐れを離れ、そして〔すでに〕超えている（'das）ので、「世尊」である。【解釈 2】あるいはまた、煩惱、蘊、天子、死〔という〕すべての魔を征した（bcom）ので「世尊」P12aである。【解釈 2.1】あるいはまた、〔その〕四魔に由来する彼のお方〔自身〕の恐怖が無くなり、〔もはやその恐怖が〕生じないから「世尊」である。【解釈 2.2】あるいはまた、その¹²四魔より生じた恐怖が実在しないことと、〔その恐怖が〕虚偽であることを理解なさっているから「世尊」である。【解釈 3】あるいはまた、福德と支配力という幸いなものを持つ（ldan）から「世尊」である。あるいはまた『聖不退転法輪經』に

虚空のような諸法を人々に¹³説くにも関わらず、かのお方には畏怖¹⁴が無いから、それ故に世尊と呼ばれるのである¹⁵。

とお説きになられたように。

4.2.4.2 因

4.2.4.2.1 「偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知をお持ちになり」の解説

この〔世〕で世尊がかつて菩薩行を行じていた際に、仏・世尊はどのような因を成就したのかと言うので、それ故に「偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知をお持ちになり」云々と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。菩薩には、偉大なる悲心の故に、活力を産み出す般若（*prajña）という知がある。その彼を「偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知をお持ちになり」〔と師 Bhāviveka は表現したので〕ある。

「偉大なる悲心の故に」とは、世間の人々が、常・断などという戲論の密な網のなかでさまよい、光に照らされていないさまをご覧になって、「ああ、悲しいD10bことに世間の人々は苦しんでいる」と菩薩がそのようにお考えになったときに、世間に対する大いなる悲心が生じたので、である。そのうち「悲心」とは苦から

というように訳し分けているが、両語とも想定される Skt.語は「bhagavat」である。ここでは、どちらが真の「bhagavat」かが問題とされている。cf. *Bam po gnyis pa* 'bhagavān'.

¹¹ 以下、語義解釈がなされるが、「bhagavat」を分解し、解釈を施していると言うよりは、「bcom ldan 'das」を分析しているように見える。

¹² D de'i: P des.

¹³ D lus can dag la: P lus can dag las.

¹⁴ D brmyes pa: P snyengs pa.

¹⁵ 'phags pa Phyir mi ldog pa'i 'khor lo zhes bya ba theg pa chen po'i mdo (*ārya Avaivartacakra nāma mahāyānasūtra), D240 Zha 287a2, P906 Wu 304b3 - 4: "nam mkha' 'dra ba'i chos kyi nams // lus can nams la rab ston kyang // de ni de la 'jigs pa med // des na bcom ldan 'das shes bya //"; 『不退転法輪經』T9, 247c22-23: 「諸法猶虚空 顯示現衆生 於彼亦無畏 是名爲世尊」。

の救護 (skyob pa) を特徴としている。「偉大なる」とは「大いなる」ということであり、[というの] 世間のあらゆる人々を対象としているからである。

P12b 「その偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知」とは、大いなる悲心が生じたというその因によって世間を哀れんで、「最勝の乗りものをもって、人々に縁起という最高の宝石を説こう」とお考えになる般若のことである。そのうち「活力」とは、最勝の乗りものによって行く者たちに、縁起という最高の宝石を説こうというお考えである。「産み出す (<*pra√bhū)」について言えば、最高のもの (*parama) として [活力を] 産み出すか、あるいはまた、いちいちの (*prati-) 有情のために [活力を] 産み出すかである¹⁶。「知」とは般若のことであり、「最勝の乗りものによって行く者たちに、縁起という最高の宝石を説こう」とお考えになる般若である。

「お持ちになり」について言えば、以上 [述べてきた] ように、菩薩には偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知がある。その彼を「偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知をお持ちになり」と [師 Bhāviveka は] 表現したのである。

世間の人々が、常・断などという戲論の密な網のなかでさまよい、光に照らされていないさまをご覧になって、菩薩に大いなる悲心が生じるというそのことは、どのように知られるのかというならば、すなわち聖『宝雲』¹⁷『思益梵天所問』¹⁸『總持自在王所問』¹⁹などの經典に [次のように説かれている]。

その [如来の五力²⁰] のうち、如来の大いなる悲心とはいかなるものかというならば、良家の子よ、如来の大いなる悲心は三十二相をともしない、限りなく無限の十方世界において不可思議なものとして生じる。三十二とはどのようなものかというならば、すなわち、(1) 一切法が無我 (*nairātmya) であるのに、有情たちは無我を信解しないから、それ故に有情たちに対して如来の大いなる悲心が生じるのである。一切法が、(2) 無有情 (*niḥsattva), (3) 無命 (*nirjīva), (4) 無補特伽羅 (*niḥpudgala), (5) 無体 (*abhāva), (6) 無住 (*aniketāḥ), (7) 無本 (*anālaya), (8) 無我所 (*amama), (9) 無主 (*asvāmika), (10) 無物 (*avastuka), (11) 不生 (*ajāta), (12) 不滅不生 (*acyutānutpanna), (13) 無煩惱 (*asaṃkṣiṣṭa),

P13a
D11a

¹⁶ 「reb tu bskyed pa (産み出す)」というチベット語に対して想定されるサンスクリット語根 pra√bhū のうちの接頭辞 pra- について、「parama」と「prati-」という二通りの解釈を施している。

¹⁷ 『宝雨經』T16, 302a9-c27.

¹⁸ see 五島[2010, 115.2-119.1].

¹⁹ 未だ同定できていない。

²⁰ see 五島[2010, 109.2-5b].

(14) 離貪 (*vigatārāga), (15) 離瞋 (*vigatadveṣa), (16) 離痴 (*vigatamoha), (17) 無来 (*anāgatika), (18) 無去 (*agatika), (19) 無為 (*anabhisamkāra), (20) 無戲論 (*aprapañca), (21) 空 (*śūnya), (22) 無相 (*animitta), (23) 無願 (*apraṇihita) であるのに、有情たちは〔無有情を信解せず、乃至〕願うのである。以上のようにであるから、有情たちに対して如来の大いなる悲心が生じるのである。

(24) 「ああ、この世間に住する者は、互いに争いによって奪い合い、害心の頑迷さと瞋恚を起こしている」と見て、彼らに対して、害心の頑迷さと瞋恚を断ち切るために法を説くべきである。(25) ああ、この世間に住する者は、顛倒をともない、険しい道に入り、誤った道に留まっているのだが、彼らを正しい道に導くべきである。(26) ああ、この世間に住する者は貪り、欲望に打ち負かされ、足るを知らず、他人の富を奪うのであるが、彼らに、聖なる富である信、戒、聴聞、喜捨、智慧、慚、愧という富を産み出すべきである。(27) ああ、これら有情たちは、妻、家屋、富、穀物に対する欲望によって輪廻している。つまり実体がないものに実体を思い浮かべているのであるが、彼らに対して端的に無常であることを説くべきである。(28) ああ、これら有情たちは正しくない仕方生活している。つまり、お互いに騙しあっているのだが、彼らに生活を清らかにさせるために法を説いたのである。(29) ああ、P13b
これら有情たちは〔本当の〕満足を知らない。つまり、利益を得、尊敬され、誉められる程度のことで「私たちは満足である」と感じている。しかし彼らには、苦が鎮まり幸いなる涅槃をもって真に満足を知らせよう。(30) ああ、D11b
これら有情たちは、家のようにあり苦の器である煩惱に対して常に喜んで
いるのだが、それらを厭って三界から超出させるために法を説くべきである。

(31) 一切法が因によって〔今に〕至っている。〔つまり一切法が因によって〕成立したものとして住することを特徴としているとき、そこで、有情たちは聖なる解脱をすることに関して怠っているのだが、彼らに、解脱に集中するための努力を始めさせるよう法を説くべきである。(32) 有情たちは極めて聖なる般涅槃〔のための〕執着のない最上のこの知に見向きもせず、声聞乗と縁覚乗という劣ったものを追い求めるのだが、彼らに仏の知を認識させるために、広大なものに対する知を信解させるべきである、というように、有情に対して如来の大いなる悲心が生じるのである。

良家の子よ、それら三十二相を伴うとき、有情に対して如来の大いなる悲心が生じるのである。それ故に、如来は大いなる悲心に住すると言われる。

良家の子よ、ある菩薩に有情にたいするそれら三十二相を具えた大いなる悲心が生じるとき、大いなる輝きをもつ福田によって増大するその菩薩・摩訶薩は、退転することなく有情のために努めると知るべきである。

P14a 以上のように〔経典に〕お説きになったことから〔菩薩の大悲心の生起を〕知るべきである。そのように、偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知をお持ちになり、世間を哀れんで、最勝の乗りものをもって、人々に縁起という最高の宝石を説こうとお考えになったのである。

4.2.4.2.2 「幾百千コーティ・ナユタという量り知れない劫の中で、福德と知の数えきれないほどの資糧の荷をお積みになった」の解説

〔その〕とき²¹、「自らが解脱せずに他者を解脱させよう」という〔動機〕は正しくなく、自身が仏性を得ないと、生・滅などという戲論の密な網のなかでさまよい、光に照らされていない、その世間の人々を出離させることはできないから、それ故に、自身がまず先に仏の因を強固にしようとお思いになって、彼は百千コーティ・ナユタという量り知れない劫の中で、福德と知の数えきれないほどの資糧の荷をお積みになったのである。

D12a どのくらいの期間、仏・世尊の因を強固になさったのかというならば、「幾百千コーティ・ナユタという量り知れない劫の中で」と〔師 Bhāviveka によって〕語られた。つまり三阿僧祇劫にわたってである。

その期間、仏・世尊のいかなる因を強固になさったのかというならば、それ故に、「福德と知の数えきれないほどの資糧」と〔師 Bhāviveka によって〕語られたのである。そのうち「福德の資糧」とは布施、持戒、忍辱という三つの波羅蜜である。「知の資糧」とは禅定、智慧という二つの波羅蜜である。精進波羅蜜は〔福德と智という〕二つの資糧の本質であり、〔というのも〕その資糧二つともに、精進があるからである。あるいはまた、すべての波羅蜜が他者に説かれるとき、そのすべて〔の波羅蜜〕は法施を特徴とする福德の資糧であり、すべての波羅蜜が、不可得なる施物・能施・所施などというかたちで修習されるとき、そのすべて〔の波羅蜜〕は三輪清浄を特徴とする知の資糧である。

P14b 「資糧 (tshogs)」とは資糧 (tshogs pa) であり²²、「あつまり (*skandha)」という意味である。「数えきれないほどの」とは、量として表すことができないから「数

²¹ D dgongs pa na: P dgongs pa nas.

²² tshogs zhes bya ba ni tshogs pa ste/. サンスクリット原文が想定しにくい注釈の仕方である。

えきれないほどの」である。「福德の資糧」も数えきれないほどであり、「知の資糧」も数えきれないほどなのである。「荷」について言えば、「福德と知の数えきれないほどの資糧」そのものが「荷」である。似て非なる (lhur len pa: *ābhāsa) 自利をもってしては背負い難いから〔「重²³荷」〕である。「お積みになった」とはその「荷」を集積なさったのであり、「打ち立てられた」という意味である。

4.2.4.2.3 「そのとき、他者に利益が生じることと結びつき、自身の命を捨てる苦しみによって

さえも倦むことのない御心をもって」の解説

「なった。そのとき」という語は²⁴「そのように荷をお積みになったとき、そのときに」という意味である。そのときに、「〔世尊の〕御心は、自身の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことはなかった。したがって、世間の人々〔のさまを〕ご覧になって」とつなぐべきである。なぜ菩薩の御心はすべての富やすばらしいお子などを捨て去る苦しみによって倦むことはないのかというならば、それ故に「他者に利益が生じることと結びついた御心」と〔師 Bhāviveka によって〕D12b 語られたのである。

そのうち「他者に利益を」とは他の者たちに利益を、である。「利益 (phan pa)」とは福利 (phan 'dogs) である。「他者に利益が生じること」とは他の者たちに利益が生じること、である。「生じること (skye ba)」とは生起すること ('byung ba) という意味である。「それと結びついた御心」について言えば、自身の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことのなかった御心には、他者に利益が生じることとの結びつきがある。それが「他者に利益が生じることと結びついた御心」である。P15a 他者に利益が生じることと結びついた御心、それが自身の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことはなかったから、菩薩の御心はすべての富やすばらしいお子などを捨て去る苦しみによって倦むことはないのである。

どのようにお考えになったとき、自身の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことはなかったのかと言えば〔次の通りである〕。自身が輪廻しているときに、命を捨てるという意味の見出せない多くの苦しみを経験してきたにも関わらず、仏性を生じさせる〔原因である〕他者への利益には思い至らなかった。しかし、自身の命を捧げる (yongs su gtong ba) というこのことよって他者を利する者は、仏

²³ Tib.- Eng. Dic. (Jäschke) によると「khur」は「荷物」の中でも重いものを指すようである。

²⁴ pa na zhes bya ba'i sgra ni. 「pa na」が注釈されており、動詞語尾の説明かと思われるが、サンスクリット原文は想定しにくい。

性を得ることになるのである。このようにお考えになったとき、無上の幸福という恵み (myed pa) によって潤ったその御心は、自身の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことはなかったのである。

4.2.4.2.4 「世間の人々が、生・滅、断・常、来・去、異・一などという戲論の密な網のなかでさまよい、光に照らされていないさまをご覧になって」の解説

「お持ちになり」という語は「〔先に述べた〕ような御心をお持ちになった菩薩が、世間の人々が、生・滅などという戲論の密な網のなかでさまよい、光に照らされないさまをご覧になって」というようにつなぐべきである。「世間の人々」とは被限定語であり、「生・滅、断・常、来・去、異・一などという戲論の密な網のなかでさまよい、光に照らされていない」というのがその限定語である。そのうち「世間」とは、壊れる ('jig pa) から世間 ('jig rten) であり²⁵、〔ここでは〕有情世間のことである。「生・滅、断・常、来・去、異・一などという戲論の密な網」とは輪廻の同義語である。「など」という語は、色・声・香・味・触・法などを含んでいる²⁶。「戲論」とは、生・滅などそれ自体が戲論であり、「戲論」とはことばのふるまいである。「戲論の網」について言えば、輪廻は戲論それ自身を縛るものであるから「戲論の網」である。「密な」について言えば、網それ自身が暗い (mun nag) から戲論の密な網であり、「暗くなって通過しにくい」という意味である。そのように、「生・滅などという戲論の密な網のなかで」とそう言われることによって、「輪廻のなかで」ということが示されているのである。「さまよって」とは、先に説明した戲論の密な網、そこに入りこむ、であり、その〔ことば〕によって、世間の人々は生・滅などという戲論の暗く密な網のような輪廻のなかでさまようことが説かれているのである。

「光がない」について言えば、そのようにその世間の人々は戲論の密な網という輪廻のなかでさまよっているだけでなく、次に〔述べる〕ようにその世間の人々はさらに光がないのであり、その〔ことば〕によって、世間を超える智慧の、日光のような光がないことが説かれているのである。たとえばトゲのある草 (tsher ma) や樹木 (shing ljon pa) やつる草 (lcug ma)²⁷といった密な網の中でさまよう者が、光

²⁵ cf. AKBh: lujyata iti lokah / (ad. chap. 1, k. 8cd ; 櫻部建『俱舍論の研究(界・根品)』法蔵館, 1969, 148.5b).

²⁶ see 西山[2010, fn. 16].

²⁷ いずれの植物もトゲを持っているようである(以下の同定には龍谷大学大学院研究生・井上綾瀬博士のご協力があったことをここに記し、同博士に感謝申し上げます)。

なしにその〔網〕から抜け出ることにはできないように、戯論の密な網という輪廻のなかでさまよう者もまた、世間を超えている智慧の光なしにその〔輪廻〕から抜け出ることにはできないので、それ故に、「戯論の密な網のなかでさまよって、光がない」と言われるのである。それを「ご覧になって」とは、世尊がかつて菩薩行を実践していたときに、その世間の人々をご覧になって、である。

4.2.4.2.5 「智慧によって所知の海を攪拌し」の解説

それをご覧になってから、何によってどのようなもののかき混ぜたのかと言うならば、それ故に、「智慧によって所知の海を攪拌して」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。およそこの世では、スラとアスラたちが、スメールという攪拌棒によって乳海をかき混ぜることから生じたアムリタ（不死）²⁸を、一切の有情が飲んだとしても、〔かれらが〕死ぬことには変わらない。しかし世尊は、福德と知の荷をお積みになり、〔その〕集積によって菩提坐にお座りになってから、スメールという攪拌棒のような智慧によって、乳海のような所知をかき混ぜることによって一切法の真実というアムリタを獲得なさったのであり、その〔アムリタ〕は、たった独りで修習（bstar）したものであったとしても、無上正等菩提を現等覚する因なのである。そのうち「智慧（*prajñā）によって」とは、金剛のような禅定によって開かれた、法を弁別する²⁹智慧によって、である。「所知の海」とは所知自身が海であるから「所知の海」であり、〔所知は〕海のように限らないからである。「攪拌して」とは、真実をありのままに理解なさって、である。以上は仏・世尊の因を説明したものである。

（以上）

・ tsher ma (= tshe sngon?): *Meconopsis horridula* Hook. f. et Thoms. (ケシの一種)

・ shing ljon pa (= gu gul?): *Commiphora myrrha* Engl. (ブデリウム的一种)

・ lcug ma (= 'bri ta sa 'dzin): *Fragaria orientalis* Lozinsk. (野イチゴの一種)

see 中国科学院西北高原生物研究所编著『藏药志』青海人民出版社, 1991.

²⁸ *Mahābhārata* 第 1 巻第 15-16 章（上村勝彦『原典訳マハーバーラタ 1』ちくま学芸文庫, 2002, 143.6-148.6）.

²⁹ see 西山[2012, fn. 36].

シノプシス

4 論典のつながり

4.1 総論 論典のつながりには「系譜のつながり」と「意味のつながり」との二種がある。

4.2 釈尊の出現の因と果

4.2.1 pratīka の導入 釈尊が説法を開始した経緯

4.2.2 意味のつながり pratīka の文言のどの部分が釈尊出現の因を述べた箇所、自利の果と利他の果はどこに該当するのか。

4.2.3 意味のつながりの結びつき 意味のつながりを結びつけることによって、系譜のつながりが示される。

4.2.4 字句の意味

4.2.4.1 「世尊」について 「真の世尊」と、「世尊」の語義解釈との提示。

4.2.4.2 因

4.2.4.2.1 「偉大なる悲心の故に、活力を産み出す知をお持ちになり」の解説

4.2.4.2.2 「幾百千コーティ・ナユタという量り知れない劫の中で、福德と知の数えきれないほどの資糧の荷をお積みになった」の解説

4.2.4.2.3 「そのとき、他者に利益が生じることと結びつき、自身の命を捨てる苦しみによってさえも倦むことのない御心をもって」の解説

4.2.4.2.4 「世間の人々が、生・滅、断・常、来・去、異・一などという戯論の密な網のなかでさまよい、光に照らされていないさまをご覧になって」の解説

4.2.4.2.5 「智慧によって所知の海を攪拌し」の解説

テキスト

AKBh Vasubandhu. *Abhidharmakośabhāṣya*. Pradhan, Prahlad. ed. *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series 8. Patna, Jayaswal Research Institute 1967.

Bam po gnyis pa sGra sbyor bam po gnyis pa. Ishikawa, Mie. ed. *A Critical Edition of the sGra sbyor bam po gnyis pa*, Toyo Bunko, 1990 (『和訳と注解』1993).

PP Bhāviveka. *Prajñāpradīpa*. D 3853, P 5253.

PPT Avalokitavratā. *Prajñāpradīpa-ṭīkā*. D 3859, P 5259.

参考文献

- 赤羽律・早島慧・西山亮 2011 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第 XXIV 章 テキストと和訳 (1)」『インド学チベット学研究』15, pp. 165-195.
- 天野宏英 1969 「現觀莊嚴論の著作目的について：ハリバドラの解釈方法」『印度学仏教学研究』34 (17-2), pp. 59-69(L).
- 一郷正道 1977 (1985) 「著作目的に関するシャーンタラクシタ、カマラシーラの見解をめぐって」『中觀莊嚴論の研究：シャーンタラクシタの思想』pp. 1-11 (originally published in 1977).
- 五島清隆 2010 「チベット訳『梵天所問經』：和訳と訳注 (2)」『インド学チベット学研究』14, pp. 89-125.
- 西山亮 2010 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第一章和訳 (1)」『龍谷大学佛教学研究室内報』15, pp. 54-69.
- 西山亮 2012 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第一章和訳 (2)」『龍谷大学佛教学研究室内報』16, pp. 23-41.
- 能仁正顕 1992 「『知恵のとしび』第 1 章の和訳(1): 縁の考察」『仏教と福祉の研究』永田文昌堂, pp. 45-66.
- Ames, William M. 1993 “BHĀVAVIVEKA’S *PRAJÑĀPRDĪPA*, A Translation of Chapter One : ‘EXAMINATION OF CAUSAL CONDITIONS’ (*PRATYAYA*)” *Journal of Indian Philosophy* 21, pp. 209-259.
- Funayama, Toru 1995 ‘Arcaṭa, Śāntarakṣita, Jinendrabuddhi, and Kamalaśīla on the Aim of a Treatise (*prayojana*)’ *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasasiens und Archiv für indische Philosophie* 39, pp. 181-201.
- Kajiyama, Yuichi 1963 “Bhāvaviveka’s *Prajñāpradīpaḥ* (1. Kapitel)” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 7, pp. 37-62.

<キーワード> *Prajñāpradīpa-ṭīkā*, Avalokitavrata, Bhāviveka, 中論, 般若灯論, 觀因縁品

(本学大学院研究生, 龍谷大学アジア仏教文化研究センター・リサーチアシスタント)